

コウノトリ野生復帰検証事業 検証結果にかかる記者会見（要旨）

●内 容

- ・と き 平成26年6月27日（金） 13：35～14：20
- ・ところ 豊岡市役所3階 庁議室
- ・会見者 共同主体を代表して、事務局である豊岡市（市長）から会見
※説明補助 豊岡河川国道事務所、兵庫県但馬県民局
県立コウノトリの郷公園、（株）建設環境研究所
- ・配付物 ①まとめのペーパー（5ページ）
コウノトリ野生復帰検証事業 検証結果の報告
②検証報告書「概要版」サンプル（28ページ）
コウノトリ野生復帰に係る取り組みの広がりとの分析と評価〔概要版〕
③検証結果に関する涌井委員長コメントDVD（約17分）
- ・流 れ ①事業の趣旨説明（豊岡市長）
 - ・資料P1「1. 今回の検証事業について」に沿って、豊岡市長が事業実施主体として事業に至る経緯や目的、検証体制について説明。②検証結果の説明（涌井委員長）
 - ・資料P1「2. 検証の手法と特徴について」、P2「3. 検証結果の概要について」に沿って、市コウノトリ共生課長が項目を紹介しつつ、検証委員会からの解説（涌井委員長コメント映像）を挟みながら検証結果を説明。③今後の利活用（豊岡市長）
 - ・資料P5「4. 検証結果の公表について」に沿って、検証報告書の公表や今後の利活用について説明。

●質疑・応答抜粋

Q) 学際的に研究してリサーチしたものが今まで無かった。このたび初めてコウノトリと地域社会の関係性がまとめられたということか。

A) 学際的なまとめとしてはそうですね。

それから初めてなのはそれだけではなく、そもそも取り組みをしてきた主体自身が第三者に委託をして自分たちのやったことを検証してもらうということ自体が珍しいこと。

その際に、先ほどありましたように、共感や心、つまり実際に運動が広がっていく過程というのが、頭でわかるということだけではなく、共感、つまり心の中で「そうだ」と納得した時に人々が動き出す。その連鎖が意図的に、あるいは偶然的につながってきたというふうの一つ特色づけている訳ですね。

その時の共感の柱は何かというと、「同じ命だ」という“命への共感”ということがまず一つある。人間とコウノトリと姿形は違うけれども同じ命だという共感が、行政マンや飼

育に関わる人、農業をやる人、子どもたち、いろんな人たちに広がっていったというのが一つ。

もう一つは、「この地が好きだ」という“場所に対する愛着”のようなものが行政の人や政治家や飼育に関わる人、農業に関わる人に広がっていった。そのベースのところを見ると「命への共感」ということと「地域への愛着」というものが抽出をされるのではないかと。

こうしたアプローチというのも、今までの分析から見ると非常に珍しいアプローチだろうと思います。純粋に「理科系的なアプローチ」ということではなく、この運動自体はまさに人々の活動が成しあげてきたものですから、その活動の背後というか、原動力になったものは何だろうということの分析がなされたというところに特徴があると思います。

それと、組織論的には、科学もさまざまな分野の科学が関わっている。行政と一言で言いますが、文化庁や農水省や国交省や環境省や兵庫県、兵庫県も農業に関わる場所、川に関わる場所、豊岡市もいろんな部署が関わってきている。地域社会の側も農業者やJAや子どもたちやいろんな人たちが関わってきていて、互いに連携し、共通のイメージ、つまり「コウノトリも住めるまちをつくりたい」というイメージを持ってそれぞれが役割を果たしてきたという、この推進母体というか推進主体の有りようも極めて特色的である。

多くの場合は、例えば科学が突っ走って地域社会と軋轢を起こしているとか、地域の人は頑張っているけれども行政は横を向いているとか、行政は頑張っているけど他はしらけているとか、そういうことが多い訳ですが、コウノトリ野生復帰の場合はそこが見事に、科学と行政と地域社会の連携が、それも発展的に広がってきている。それも一つの大きな特色なんだろうと思います。

もう一つは「自然財を活かした持続可能な地域づくりモデル」とありますが、これも私なりの表現をすると、生物多様性の保全という普遍的な価値と、地域の活性化というローカルな利益を統合する試みであると。つまり、生物多様性を守らなければならない、自然も大切だよねという普遍的な価値のために、地域の人が辛抱して貢献するというのではなく、自分たちの地域を元気にしたいというローカルな関心と、普遍的なものを統合するということをやってきた。その普遍的なものというのがここで言う「自然財」とすると、市長風にまとめるとそうなるかなと思います。

研究者の方と若干違うかも知れませんが、ザクッとエッセンスをとらえるとそういうことではないかと思っています。この3つが、まさに「ひょうご豊岡モデル」なのかなというふうに受け取った側としては理解をしているところです。

Q) 生きものを中心とした形で地域の心とか共感、内面的なものまで含めての活性化、発展というところを検証した取り組み、こういう例は今までなかったと考えていいのか。

A) 委員長はそうおっしゃっています。分析のアプローチのしかた自体がなかったことだし、それから今申しあげたようなことを現実を実現しているということも世界の中では稀ではないかという評価です。

Q) この結果を踏まえて、市としてこの先どういった方向を考えているか。

A) もともとこの検証事業の狙いは、一つは外への発信。つまり豊岡と同じような努力を続けている地域・人々が世界中におられる。そこに対して、少し先に行く豊岡から、言わばエールを送るというのが一つです。そのためにも、英語であるとかいろんな言語に訳すということをお願いしてきました。したがってこれから、世界に向けて豊岡の取り組みを、豊岡というのは豊岡市役所ということではなく、豊岡という地域のことですけれども、それをさまざまな場面で訴えていく。そして、世界中で活動がさらに前に行くようにエールを送っていこう。具体的には、来月の国際かいぎもありますし、生物多様性条約のCOP12がその後韓国でありますから、そういった場を利用しながら発信していきます。

それからもう一つは内に向けてですけれども、今後の課題として、P4に「さらなる進展に向けた課題と留意ポイント」があげられています。このへんを参考にしながら豊岡の取り組みをさらに深めていきたいと思っておりますけれども、一つは今あるものを量的に増やしていく、例えばコウノトリ育む農法を量的にさらに広げていくとか、あるいは湿地再生が国や県によってさらに広げられていくといった量的なことをさらに推し進める。我々はまだ100点には至っておりませんので、そういった課題は一つ見えてきていて、それは引き続きやっていきたいと思っています。

それから、ある意味非常に高い評価をいただいたと思っているのですが、それを次の世代に引き渡していかなければならない。私たちは、私たちの先輩も含めてここまで切り拓いてきた。ですから、若い人たちはここからの出発点ということになります。若い世代がまた一からやっているようでは前に行きませんので、その意味では今回まとめられて、今豊岡はここまで来ている、そのことを市民やとりわけ若い世代、子どもたちに提示をして、そして君たちが行くべきはここから先である、というふうにして運動を世代を越えてつなげていきたいというふうに思っています。

同時に、先ほどポイントが3つ出ていましたけれども、おそらく世界でも稀な例だというふうに思います。多くの場合には環境の側が企業と戦って負けているとか、あるいは開発思考の行政機関と戦ってなかなか勝てないというそういった例はいっぱいあるだろうと思いますけれども、豊岡はそのあたりが比較的うまく来ている。その意味でも、世界へ知らせると同時に、豊岡の誇りにつなげていく。つまりこういうふうに評価をいただいたことを豊岡の人たちに伝えることによって、私たちは誇るべきまちづくりを進めている、そのことにつなげて、さらなるエネルギーにつなげていくことができるのではないかと。自分に対する誇りというのはまちづくりのエネルギーになりますので、そのことへ明確につなげていく。

その辺が、受け取った市長としての感想です。

Q) 「ひょうご豊岡」とひらがな・漢字とした理由は？

A) 豊岡が漢字であることは明確です、「豊岡」という地名はこの漢字です。この地におけるコウノトリの絶滅はなぜ起きたのか、この地におけるコウノトリの復活を成し遂げるため

にはどうするのか、とことん地域にこだわってきました。この地域の自然のありよう、この地域の伝統文化、暮らしぶり、そういうことにこだわって、深く掘っていくという作業をしてきましたので、この「豊岡」は漢字でないといけないというふうに思います。

たぶん、「ひょうご」の方は、やわらかく進もうという、そういう配慮ではないかと思えます。

Q) 質問を変えると、なぜ「豊岡モデル」でなくて「ひょうご豊岡モデル」なのか。

A) 兵庫県と豊岡市、あるいは豊岡のまちが協働して進めてきたということです。県の役割も非常に大きいものがありました。郷公園をつくったのも兵庫県です。コウノトリの科学を支えているのもコウノトリの郷公園、有機農業を広げるにしても県の普及センターが大きな役割を果たしています。という意味ではパートナーです。

その意味では、兵庫県という広域の自治体と豊岡市という自治体が一緒になってやってきたという、そういう思いを込めています。